

カフカの『ある犬の探究』(2)

—「質問すること」と空中犬—

佐々木 博康

Kafkas *Forschungen eines Hundes* (2)

—Fragestrategie und Lufthunde—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第38巻第1号

2016年9月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 38, No. 1, September 2016

OITA, JAPAN

カフカの『ある犬の探究』（2）

— 「質問すること」と空中犬—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿ではまず、語り手である探究犬が世界のさまざまな事柄について次々に「質問」することの意味は何か、次いでその関連で言及される空中犬とは何かを明らかにした。探究犬の「質問」は、形骸化し硬直化した既存の世界の社会的コードを突き崩し、その背後にある「真実」（「不壊なるもの」）を明るみに出そうとするカフカの方略を意味する。その具体的実践が、空中犬を例に語られる。空中犬とは、芸術や芸術家について多弁を弄する哲学者、評論家、文学者のことである。カフカは彼らを、一般の労働者の日々の労苦とはかけ離れた世界で、芸術や芸術家に関する高邁な思索にうつつを抜かす饒舌の徒として痛烈に皮肉っている。

【キーワード】 食物 不壊なるもの 豹 木々 評論家

4. 空からの食物とさまざまな実験

やがて探究犬は、「地上にある食物の大半が空から降りてきたもの」（461）であることに気づく。犬の中には、食物が地面に触れる前に食べてしまう者もいる。つまり、食物には、大地が「自分の内部からもたらす」（461）ものと「高みから呼び降ろす」（461）ものの二種類がある。そしてそれに応じて、「食物を手に入れる二つの主要な方法」（462）がある。すなわち、「本来の土地の手入れと、呪文と歌と踊りの形で行われる補助的で、仕上げをほどこす仕事」（462）の二つである。学問もこのような二つの方法があることを認めている。探究犬もこの点では学問に同意する。

私の考えでは、土地の手入れは両方の食物を得るために役立ち、いつもなくてはならないものである。しかし呪文と踊りと歌は、狭い意味での大地の食物にとりよりむしろ、主に食物を上から呼び降ろすのに役立っている。（462）

探究犬はさらに考えを進める。犬族の伝統的儀式は、この「呪文と踊りと歌」から成っている。もしこれらの儀式が「大地に食物を上から引き下ろす力を与える」のであれば、「大地にささやきかけ、歌い、踊りを捧げねばならない」（462）はずである。ところが、民衆は伝統的儀

平成 28 年 5 月 31 日受理

*ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座（ドイツ文学）

式を「すべて空に向けて」(463) 行っている。これについて学問は黙しているが、なぜ犬族は顔を上方に向けるのか。このような疑問から、探究犬は他の犬たちとは逆のことを試みる。踊りながら大地を掘って穴を作り、そこに鼻面を突っ込んで呪文を唱えたり、歌を歌ったりしてみたのである。しかしはかばかしい成果は得られない。

また別の実験も行う。空から降りてくる食物を他の犬たちのように途中でばくりと食べてしまわないという実験である。ただし、「わざと食物にとどかないような小さな跳躍」(465) をする。すると食物は、「たいてい気が抜けてどうでもよさそうに」(465) 地面に落ちてくるが、地面に落ちずに「宙に浮かんだまま私についてくる」(465) こともある。ただ、わずかな距離だけのことで、やがて下に落ちるか、完全に消えてしまうか、あるいは自分が我慢できなくなって食べてしまい、実験が中止になるかのいずれかの結果に終わる。

このように探究犬はあれこれ奇妙な思案に耽り、滑稽とも見える実験にいそむ。いったい探究犬は何をしているのだろうか。

ウィンケルマンは、「犬がけっして人間の存在を知覚しない」¹⁾ ことがこの物語の基礎となっていると述べている。つまり、この物語では人間の姿はまったく描かれることはないが、犬の目には見えない存在として登場しており、探究犬が空からの食物であるとみなすものは、人間が直接手で与えたり、投げたりする餌であるということである²⁾。

たとえば次のような表現がある。

(犬族は——筆者注) 何ともはや情熱的に呪文を上方に叫んだり、古い民謡を訴えるように空に向かって歌ったり、まるで大地を忘れ、体を揺すぶりながら永遠に上昇していこうとするかのように、跳躍踊りを踊ったりする(……)(463)

つまり、犬たちは人間が手に持っている餌を求めて、吠えたり、訴えるような鳴き声を出したり、飛びつこうとジャンプしたりしている、それをカフカは、犬たちの呪文や歌や踊りとして大仰に描いているのである。犬の目には見えない人間が存在するとすれば、食物がいらないかのように装う探究犬の後を、食物が「宙に浮かんだまま」ついてきたり、いつまでも食べないでいると下に落ちてしまうのも不思議なことではない。「完全に消えてしまう」のは人間が餌を引っ込めたのである。

このように考えると、探究犬の生真面目な研究がとてつもなく滑稽なものに見えてくる。ロバートソンやアルトはこのような観点から、探究犬を、認識の限界を知らず「滑稽な思弁」に耽る人間の風刺であるとみなす。だが、カフカがおかしさを意図しているところは確かにあるとしても、この物語はそれだけに尽きるものではない。カフカは自分自身の人生の問題を、一匹の犬に託して、滑稽めかしながらも真剣に振り返っているのである³⁾。

では探究犬の実験はどのような意味を持っているのだろうか。

探究犬は他の犬たちとは大いに異なっている。他の犬たちが、大地からのものであると空からのものであると、自分が食べるために食物を得ようとしているのに対して、探究犬だけは食物を求めているのではなく、食物についての「研究」を行っている。単純に食物を求めて生きている他の犬たちが、生を楽しみながら生きている普通の人々を表しているとするれば、食べ物についてさまざまな実験を繰り返す探究犬は、生の享楽から離れて、「書くこと」による試行錯誤を続けた作家としてのカフカである。すでに見たように、「書くこと」の根底にある問い

は、生を支えるものとは何かという問いであった。ただ、それが究極の問いであるとしても、それに対する答えに至るためには、日々の「書くこと」の具体的な実践が不可欠である。そして、それを寓意的に表現しているのが探究犬のさまざまな「質問」であり、奇妙な実験なのである。

音楽犬たちとの出会い以来、語り手の犬は彼らのパフォーマンスが何だったのか、犬族は何を食べて生きているのかを始めとして、大人たちに手当たり次第に「質問」をあびせる。「質問をしながら世の中をかけずり回る」(439)と言われるほどである。大人の犬たちは探究犬を突き放すことはないが、質問に答えてはくれない。どの犬も「沈黙」している。向かう先々でこの「沈黙」に突き当たる探究犬は、「沈黙の要塞、それが我々なのだ」(444)と認識する。

「質問」をすることは、カフカ自身が試みていたことでもある。

以前は、なぜ私の質問に答えが得られないのかがわからなかった。今では、どうして質問することができるかと思えることができたのかがわからない。いや、私は信じてなどいなかった。ただ質問していただけだ。⁴⁾

では質問をすることの意味は何なのだろうか。

探究犬は質問し続けるうちに、自分の質問の意味を理解し始める。(441)

すべての知識 (Wissen)、あらゆる質問と答えの全体は、犬族の内部にある。この知識を有効に働かせることさえできれば、それを明るみに出すことさえできればいいのだが。ただ、彼らは自分が認める以上に、自覚する以上に無限にたくさんを知っているのに、それを知らないと言うのだ。(441)

探究犬は、犬族の内部にあるはずの、犬族自身でさえも自覚していない「知識」を明るみに出し、有効に働かせることを望んでいる。

また、空中犬について質問をしたこととの関連で、次のようにも言われている。

それによって(=空中犬たちのことを質問することによって) 真実 (Wahrheit) が明らかになることはないにしても——そこまではいくことは決してないだろう——、それでも深く根づいた虚偽 (Lüge) はいくらかでも見えてくるのだ。(448)

後に探究犬が断食を行っているときにも、これと同じことが吐露される。断食をしているのは「虚偽の世界を脱して真実へと至るため」(475)であるとされる。探究犬はつまり、世の中にある種々の事柄について、さまざまな質問をしかけることによって、「虚偽」を排して「真実」を明らかにしようとしているのである。

人間の内部にある「すべての知識」や「真実」とは、すでに述べた「存在の本質」と同じものである。それをカフカは別のところでは、「不壊なるもの (das Unzerstörbare)」と呼んでいる。

不壊なるものは一つである。一人一人の人間がそれであり、同時にそれはすべての人に共

通のものである。人間同士の結びつきの比類なき分かちがたさはそこから来ている。⁵⁾

一人一人の人間が「不壊なるもの」であるという表現は強調と捉えるべきだろう。一人一人の人間がそれを分有していると考えれば理解しやすい⁶⁾。「不壊なるもの」が一人一人の人間の内部にあり、それは同時に全体として一つでもある⁷⁾。それゆえ人間同士は決して分かちことができず、互いに緊密に結びついている。「不壊なるもの」は根本的に「よきもの」である。しかし、本来人間は「不壊なるもの」を有し、互いに結びついているにもかかわらず、実際には個々人は孤立し、孤独である。なぜか。それは、個々人が互いの内部にある「不壊なるもの」を自覚せず、互いにそれをつなげようとしなからずである。人間同士の真のコミュニケーションは失われている。

「不壊なるもの」は、「綱」にもたとえられる。

というのも、昨日の夜、僕はこんなイメージにとらえられたんだ。人間はすべての力をみなぎらせ、互いに愛をもって助け合うことによってのみ、今にも落ち込みそうな地獄の奈落の上に (in einer höllischen Höhe)、どうにかこうにか浮かんでいられるのだということ。お互いに綱 (Seile) によって結びついているので、もしある人の綱がゆるみ、他の人たちより深く虚無の空間へ (in den leeren Raum) 沈んでいくとしたら、それはひどいことだし、もし綱が切れ、今まさに落ちていたとしたら、ぞっとする。それゆえ、人は他の人々を支えにしなければならないのだ。⁸⁾

これは 20 歳のカフカが親しい友人オスカー・ポラックに宛てて書いた手紙の一節である。ここでは、人間存在が、「今にも落ち込みそうな地獄の奈落の上に、どうにかこうにか浮かんで」いるという実存主義的なイメージで捉えられている。「地獄の奈落」は「虚無の空間」と呼ばれており、音楽犬たちの「虚無の空間」と関連していよう。それはいわば「孤独地獄」である。しかし、手紙の調子は暗くない。人とのつながりが、目に見えない「綱」というメタファーで捉えられ、「人は他の人々を支えにしなければならないのだ」と、若いカフカは友人に対して、素直に他者とのつながりの大切さを伝えている。

しかし、カフカが 34 歳ともなると様子は変わってくる。次は、カフカが 1918 年 1 月に書いたアフォリズムである。

真の道 (der wahre Weg) は一本の綱 (ein Seil) の上にある。それは高いところではなく、地面すれすれに張られている。歩いて渡っていくためというよりはむしろ、つまずかせるためにあるように思われる。⁹⁾

「真の道」とは他者への道である。人間同士は本来「綱」によって結びついており、それは他者に向かうためのものであるはずなのに、逆に人とのコミュニケーションを阻害するものになっているという皮肉である。

探究犬は、犬族の内部にある「知識」に関連して次のように述べている。

仲間の犬の周りを忍び歩き、欲情 (Begierde) のよだれをたらし、尻尾でわが身を打ちつ

ける。問いかけ、頼み、吠え、嘔み、そして獲得する——ともかくも獲得するのだ、そんな努力などしなくても得られるはずのもの、つまり、情愛に満ちて耳を傾け合うこと、やさしく触れ合うこと、相手を尊重しつつ匂いを嗅ぎ合うこと、心をこめて抱擁し合うことを。私と君の吠え声は混じり合って一つになる。すべては恍惚のうちに忘却を見出すことをめざしているが、何よりも求めていた一つのこと、つまり知識を明かし合うこと（Eingeständnis des Wissens）、それは達成されないままである。（441-2）

「欲情のよだれ」、「私と君の吠え声は混じり合って一つになる」、「すべては恍惚のうちに忘却を見出すことをめざしている」といった表現が暗示しているように、ここで含意されているのは性行為であろう。たとえそれが情愛に満ちた抱擁であったとしても、単なる肉体的結合によっては、「知識を明かし合うこと」、つまり、真のコミュニケーションは、「達成されないまま」なのである。

誰もが「不壊なるもの」を所有しながら、それを所有していることさえ自覚していない。それゆえ人間同士のコミュニケーションは機能不全に陥っている。これがカフカの人間観の根本である。そしてこれは、すでに『探究』の冒頭で述べられていたことでもある。つまり、私たちは「互いにくっつき合って温め合うこと」を求めているにもかかわらず、「互いから遠く隔たって」生きているという認識である。それはなぜなのかという問題提起からこの物語は始まっていた。「不壊なるもの」を「存在の本質」として表出していたのは音楽犬たちだけである。それゆえ、探究犬は「不壊なるもの」を追い求めるのである¹⁰⁾。

究極の「真実」、「知識」、「不壊なるもの」を明るみに出すために必要なのは、それらを取り囲んでいる数多くの「虚偽」を解体していくことである。探究犬の——そしてカフカの——「質問」はそのためになされる積極的行動なのである。

探究犬以外の犬たちは、天に向かって呪文を唱え、歌を歌い、踊りを踊る。犬族の伝統に従い、儀式に加わっている。犬族の伝統や儀式とは、現存の共同体を構成しているさまざまな法や制度、しきたり、慣習のことであり、換言すれば、共同体を秩序づけている社会的規範、社会的コードの体系のことである。カフカはそれをしばしば「法＝掟（Gesetz）」と呼んでいる。それは共同体の成員を規制していると同時に支えてもいる。この「掟」に従ってさえいけば、共同体の一員として不安なく生きていくことができる。探究犬以外の犬たちは、既存の社会的枠組みの中で、社会的コードに従って生きている。そのことに特別な異和感を感じることなく、それを自明のことと思って生きている。しかし、音楽犬体験によって「真実」に触れ、「真実」の側から現存の世界を見るようになった探究犬は、犬族の伝統や儀式をそれまでのように素直に受け入れ、唯々諾々と従うことはできない。物語の始めにおいて述べられていたように、「畏敬を感じてしかるべき民族の催しのさなか」にも、「軽い不快の念」に襲われる。「何かしっくりこないところ、小さな亀裂」を意識せざるを得ない。犬族の伝統や儀式に疑問を感じ、徹底的に調べてみようとしている。ところが探究犬がどんなに質問しても、犬たちから返ってくるのは沈黙ばかりである。このことが示しているのは、他の犬たちが、既存の社会的コードに従って生きているだけで、その意味についての問い自体を問うたことがないということである。それゆえ、そのような社会的コードの網の目の奥にある「虚無の空間」、つまり、自分自身の内部の孤独にも気づかず、互いに沈黙しながら、ばらばらに生きているのである。

次のようなよく知られたカフカのアフォリズムがある。

豹たちが神殿に侵入し、御神酒を入れた甕を飲み干してしまう。これが再三再四繰り返される。ついには予測できるようになり、それは儀式の一部となる。¹¹⁾

「儀式」が定着した現在の時点においてこの儀式に参列し、豹が御神酒の甕を飲み干してしまうさまを見る人々は、その意味が不可解であるがゆえにいつそ豹の行為に感銘を受け、それを儀式の不可欠の要素とみなすかもしれない。しかしながら、それは起源から見れば、一つの偶然から始まり、それが延々と繰り返されることで定着したものにすぎない可能性もある。絶対化されている既存の社会的コードも、偶然の固定化にすぎない場合があるのである。世界に存在する多くのものがこのような偶然の集積によって成り立っているとすれば、それを洞察した人がめまいを感じるのは当然である。カフカが『ある戦いの記述』において「陸上の船酔い (Seekrankheit auf festem Land)」¹²⁾と呼んでいるのは、そのことを指している。

人間を檻のように取り囲んでいるさまざまな制度や道徳や慣習は絶対に動かせないように見えても、実は根拠を失って硬化したものにすぎないかもしれない。しかし、人間はそのことに気づかず、社会的コードを支えとして、それにすがって生きている。ただ、支えであると思っているものの根拠は何もなく、その背後に広がっているのは「虚無の空間」かもしれないのである。人が問いを拒絶するのも、その問いを突き詰めれば、そこに見えてくるのがこの「虚無の空間」、つまり、自身の内部の孤独に他ならないからである。

沈黙にぶつかる探究犬は言う。

私たち (=自分と自分の同類たち) は、沈黙に押しひしがれ、文字通り空気を切に求めて (aus Lufthunger) 沈黙を打ち破ろうとしている者たちである。他の者たちは沈黙が快適であるように見える。なるほどただ見かけ (Anschein) だけのことかもしれない。(……) しかしこの見かけはしづとい。(451-2)

既存の社会的コードの網の目でできた世界、それを探究犬は——そして探究犬の同類たちがいるとすれば彼らも——自由を束縛された息苦しい世界とを感じる。しかし、大多数の犬たちは逆に既存の世界が「快適」なのである。だから「沈黙」しているのである。

カフカに『木々』というきわめて短い作品がある。

だって、僕たちは雪の中の木々の幹みたいなものなのだから。ちょっと見には(scheinbar)、すべっていきそうな感じでのっかっている。ちょっとつつくだけで、押しやってしまうことができそう。いや、それはできない。だって、大地にしっかりつながってるのだから。でも、ほら、それだってそう見える(scheinbar)というだけのことなのさ。¹³⁾

ここでは人間が「雪の中の木々の幹」に譬えられている。人間は「ちょっと見には」簡単に動かせそうだが、実際には大地に根を下ろしているので、それは不可能であると言われる¹⁴⁾。人間は「雪」という冷たい孤独に取り囲まれて、互いに関わり合うこともなく孤立している。だが、カフカは最後に、「でも、ほら、それだってそう見えるというだけのことなのさ」と力強く——「でも、ほら」のドイツ語原文 "Aber sieh" は強い響きを持つ——宣言している。『探

究』の探究犬が「この見かけはしぶとい」というのと異なって、『木々』を書いた若いカフカは人間が変わりうるということにもっと強い希望を抱いていたのである。そのような違いはあれ、カフカが一貫して、意味のない社会的コードを解体するために人々に働きかけようと努めてきたことがわかる。

探究犬は他の犬たちとは異なっている。伝統や儀式に素直に従わず、天に向けられた呪文や歌や踊りの意味を問う。また、踊りながら地面に穴を掘り、そこに向かって呪文を唱え歌を歌ってみるという実験を行っている。それは社会の「掟」に対するカフカの懐疑をおもしろおかしく表現したものである。このような懐疑の具体的実践が、カフカにとって「書くこと」だったのである。

だが、それは意味のあることだったのだろうか。それがこの物語を貫いている問いである。そして、一応の結論が物語の最後に示されることになる。

5. 空中犬とは何か

先に進む前に、前章で述べた「質問」をするというカフカの戦略が具体的にはどのようなになっているのかを、空中犬の例で見てみよう。

探究犬は、自分だけが特殊な犬だとは思えない。自分と同じように変わった犬がないのかと考えてみる。そのときに、自分より「もっとずっと不幸な」(446) 存在として頭に思い浮かぶのが空中犬である。それは空中を浮遊している奇妙な犬たちのことで、探究犬は実際には目にしたことはないが、それが存在することについての確かな情報は得ているという。外形は「もっとも小さな種類の犬」(446) で、探究犬の頭ほどもない。体は弱く、「犬の誇りである脚を萎えるにまかせ」(448) ており、「まともに跳ぶこともできない」(447)。毛は「念入りすぎるほどに」(447) 刈り込んでいる。地上に降りてきて歩くこともないわけではないが、それは例外的なことであり、その場合もほんの「数歩、きどって歩いてみせる」(450) にすぎない。

ウィンケルマンは、空中犬は人間の胸に抱かれ運ばれる「愛玩犬 (lap dogs)」¹⁵⁾ であるとしている。ビンダーも同じ考えであるが、「クッションで運ばれる愛玩犬である」¹⁶⁾ と述べ、カフカのテキストにある「あのクッションの上での味気ない生活」(450) のクッションを文字通りの意味で捉えている。ただ、これは空気をクッションにたとえているのであって、空中犬がクッションにのっているわけではないだろう。ロバートソンは、空中犬は家の中にいる「愛玩犬」であるとみなす。探究犬が空中犬を見たことがないのは、愛玩犬のいる家の中に一度も入ったことがないからである¹⁷⁾。室内にいるか外にいるかは別として、空中犬が愛玩犬であるとする理解は間違っていないだろう。犬には人間の姿が見えないことがこの物語の前提となっているので、歩く人間に抱かれている愛玩犬は空中を浮遊しているように見えるはずである。そう考えれば、「この犬はたいがい高い空中を動いているそうだが、そのさい何か具体的な仕事をしているわけではなく、休んでいる」(447) とされるのも納得がいく。

では、カフカは空中犬にどのような意味を込めているのだろうか¹⁸⁾。

空中犬たちは「ほとんど耐えがたいほどお喋りをし続ける」(449) とされているように、おしゃべりが最大の特徴である。「芸術と芸術家について」(448) 語り、哲学的思索について、「その高い位置から行った観察」(449) について話す。自分たちは思索をしないことはできないのだと彼らは主張する。ただ探究犬によれば、彼らの哲学にも観察にも何の価値もない。

それらは「学問にはほとんど貢献していないし、学問のほうでもそんなみすばらしい資料など当てにしていない」(449)のである。

空中犬が絶えず思索にふけることができるのは、「肉体的な労苦を完全に放棄してしまった」(449)からである。彼らは「養ってくれる大地から切り離されており、種を蒔くことはない。それなのに収穫だけは手に入れる、それどころか犬族の負担で特別の待遇にありついている(besonders gut genährt)」(448)と言われる。食物を得るための労働はしないのに、普通の犬たち以上においしいものにありついている。

探究犬は、彼らはそのことに内心後ろめたさを感じていると考えている。

彼らは(……)自分たちの生き方に対していわば赦しのようなものを得ようと努めなければならぬのだ。あるいは少なくとも、それから目を背けさせ、それを忘れさせなければならぬのだ。(448f.)

空中犬は自分たちの生き方を心の奥底では正当化できない。自分たちの生き方を同胞の犬たちに許容してもらわねばならないのである。あるいは、自分たちの生き方が詳しく吟味されないように、絶え間なく饒舌を弄して大衆を煙に巻くしかない。彼らが絶え間ないお喋りを続けるのはそのためなのである。

ここまで見てくれば、空中犬が、芸術や芸術家について多弁を弄する哲学者や評論家や文学者のことであることは明らかであろう。カフカは彼らを、労働を免れ、芸術や芸術家に関する高邁な思索にうつつを抜かしている饒舌の徒として、また、一般の労働者の日々の労苦とはかけ離れた世界で自己満足しつつ生きている存在として、痛烈に皮肉っているのである。大地との接触を失い、空理空論に墮している空中犬は、マルクス流に言うなら、下部構造を無視して上部構造だけに目を向けている存在である。伝記的に見るなら、ここで含意されているのは、文学カフェ・アルコ、哲学者フランツ・ブレンターノの研究が行われたカフェ・ルーヴル、当時の最新の学問が紹介されたベルタ・ファンタ夫人のサロンなどに集い議論に耽った、当時のプラハで上層を占める作家や知識人たちのことであると考えられる¹⁹⁾。

探究犬は、「自己満足して空中に浮かんでいる」空中犬を、「美しい毛皮以上のものではない」(450)と断じ、その「存在の無意味さ」(447)に驚く。そこで探究犬は「質問」をする。ほかの犬たちに、「空中犬にはいったいどんな意味があるのか」(449)と訊ねる。

いつもいつも、学問に多大の貢献をしているという答えが返ってくる。それに対しては、「そのとおりです。でも彼らの貢献には価値がなく、煩わしいだけです」と言う。そこから先は、肩をすくめるか、話をそらすか、怒るか、笑うか。しばらくしてまた訊ねると、彼らは学問に貢献しているという答えをまた聞くことになる。そしてついには、人からその後訊ねられて、ぼんやりしていると、自分でも同じことを答えているということになる。(449)

一般の犬たちは、空中犬は「学問に多大の貢献をしている」と思っている。そしてそれで満足している。それ以上先を考え、空中犬の存在の意味を突き詰めることはない。周囲の犬たちがいつもいつも空中犬は「学問に多大の貢献をしている」と繰り返すので、探究犬のほうも他

の犬から訊かれると同じように答えてしまうことさえある。御神酒を飲み干す豹についてのアフォリズムと同じことがここでも生じている。根拠のないそのような無数の言葉の集積、つまり、「記号」の体系によって世界は出来上がっているのである。

そのような中で、「空中犬にはいったいどんな意味があるのか」という探究犬の「質問」は、空しいものではあっても、「少々の動き」をもたらす。質問がなされることによって、「根拠づけ」が必要となるからである。それがそれほどたいした成果をもたらさなくても、「それでも一歩」なのである。すでに述べたように、「それによって真実（Wahrheit）が明らかになることはないにしても（……），それでも深く根づいた虚偽（Lüge）はいくらかでも見えてくる」（448）からである。

誰もが当然と思い、問う必要もないと思っていることが、質問をすることによって一つの「問題」として浮かび上がってくる。表面的な記号と化しつつも存続し続けるさまざまな虚偽の根拠を問うことで、少しでも真実に近づくこと、これが探究犬の方略なのである。空中犬の「存在の無意味さ」は「黙して語られない（schweigende）無意味さ」（447）であると探究犬はいう。真実はいつも「黙して語られない」のである。探究犬は「質問」を投げかけることによって人々の沈黙の鎧を溶かし、その奥にある「真実」を明るみに出そうとする。

だが、探究犬は次のように反省もする。

ひょっとしたら、あまり頑なにならず、柔軟に考えて、すでに存在する空中犬たちの存在の正当性を認めるほうがいいのかもかもしれない。できないことであるにしても、我慢することはできるのだから。（449f.）

「あまり頑なにならず、柔軟に考えて」——これが一般の犬たちの生き方であろう。そしてそのように生きることができず、異和感を感じて「質問」を投げざるをえないのが探究犬のはずである。ただここで、「我慢することはできる」といったん譲歩してみせたのは、空中犬という風刺を終えるにあたって、さらに強烈な比喩を持ち出すためである。それは「繁殖」の喩えである。

現存の空中犬だけなら「我慢する」ことはできるが、空中犬は次々に現れてくる。どんどん現れてきて、その存在を「容認せよ」と求めてくる。「それはいきすぎだ」、それは「やめてほしい」（450）と探究犬はいう。空中犬は生殖能力もなさそうだし、いつも一匹でいるのにどういうわけか増殖する。「無の中からさえ次々と新しい後継者（Nachwuchs）を見つけ出してくる」（451）。探究犬は次のように結論づける。

ひとたび存在することになった犬の種（Hundeart）は、どんなに奇妙なものであっても、死に絶えることはない、少なくとも簡単には死に絶えることはない、少なくとも長い間にわたってうまく絶滅を免れるのに与ってきた何かがあるような種類の犬の中にもあるということだ。（450f.）

「長い間にわたってうまく絶滅を免れるのに与ってきた何か」とは自己保存の力である。いったん成立したものは、それがどんな意味があるのかということとは関係なく、それを支えていたはずの根拠がすでに消えてしまったとしても、自己保存の力によって延々と存続し続ける。

いや、存続させるためにひたすら努力がなされると言ったほうがより正確だろう。哲学者や評論家や文学者が躍起になって自分の「後継者」を養成し続けることが痛烈に皮肉られているのである。

注

- 1) Winkelman, a. a. O., S. 204.
- 2) Winkelman, a. a. O., S. 206, Robertson, a. a. O., S. 358, Alt, a. a. O., S. 655.
- 3) ウィンケルマンも、この物語は「ユーモラスでコミカルな、しかし真剣な意味をもった物語」であると述べている。(Winkelman, a. a. O., S. 213.)
- 4) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, hrsg. v. Jost Schillemeit, Frankfurt a. M.: Fischer 1992 (=NSF II), S. 120f.
- 5) NSF II, S. 66, S. 128.
- 6) カフカは「自らの内にある不壊なるもの」という表現も使っている。NSF II, S. 55.
- 7) 林寄伸二は、「不壊なるもの」が「人類の一体性の観念」と結びついていることを指摘している。林寄伸二『『都市の紋章』——ユダヤ性と不壊なるもの——』（上江憲治・野口広明編著『カフカ後期作品論集』同出版社、2016、268～305頁）参照のこと。
- 8) 1903年12月20日付けのオスカー・ポラック宛の手紙。Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Frankfurt a. M. 1999, S. 32f.
- 9) NSF II, S. 113.
- 10) カフカによって削除された箇所（プロート版全集では削除されていない）では、「真実」、「知識」、「不壊なるもの」は、骨の「髄」に譬えられている。「もっとも高貴な髄を含むこの骨は、すべての犬のすべての歯が一緒になって噛むことによるのみ、なんとかすることができる。これはもちろん単なる喩えで、誇張だ。すべての歯の用意が整えば、もはや噛む必要はないだろう。骨はひとりでに開き、髄があらわになって、どんな弱い小犬でも食べることができるだろう。」(NSF II *Apparatband*, S. 358f.) ——すべての犬がそれに目を向けるとき、「不壊なるもの」は自然に出現すると述べられている。
- 11) NSF II, S. 117.
- 12) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Hrsg. v. Malcolm Pasley, Frankfurt a. M.: Fischer 1993 (=NSF I), S. 89.
- 13) Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten. Kritische Ausgabe*. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994, S. 33.
- 14) 『木々』は『ある戦いの記述』A稿の一節を独立させて小品としたものだが、そこでは、「というも、私たちはすでに自分たちの大地に据えつけられており、お互いの了解のもとに生きているからです」(NSF I, S. 109) という「私」の発言に対する「祈る人」の返答となっている。
- 15) Winkelman, a. a. O., S. 205.
- 16) Binder, a. a. O., S. 278.
- 17) Robertson, a. a. O., S. 360f.
- 18) 空中犬についてのこれまでの解釈については、Berg, a. a. O.を参照のこと。
- 19) Pawel, a. a. O., S. 166-172.

Kafkas *Forschungen eines Hundes* (2)

— Fragestrategie und Lufthunde —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

In der vorliegenden Arbeit habe ich zweierlei zu klären versucht. Einmal was es mit der Fragestrategie des Forscherhunds auf sich hat, mit der er seine Mithunde konfrontiert, zum anderen welche Rolle in diesem Zusammenhang die Lufthunde spielen.

Der Forscherhund stellt seinen Mithunden verschiedene Fragen über die Nahrung, erhält aber trotz Insistierens keine Antworten. Diese Fragestrategie exekutiert Kafkas kritisches Erkenntnisinteresse: die innerlich ausgehöhlten und erstarrten Werte und Normen der herrschenden Welt zu hinterfragen, Lügen zu entlarven und die Wahrheit ans Licht zu bringen.

Als Beispiele fungieren in dieser Strategie sogenannte Lufthunde. Sie stehen für Philosophen, Kritiker und Literaten, die Kafka mit bitterer Ironie als Schwätzer kritisiert. Abgehoben von der wirklichen Welt der Arbeit, geben sich diese sublimen Gedankenspielerereien über Kunst und Künstler hin.

【Key words】 Nahrung, das Unzerstörbare, Panther, Bäume, Kritiker

